

夏休み

く海の家く

少年とおじさん。皿やグラス、ドンブリなど、新聞紙で包みダンボールに詰めるおじさんの横で、少年は海からの夕陽の中、テーブルに山と積まれた一円玉を十枚つつ重ねながら。

少年　　思い出すよね、おじさん。

おじさん　　忘れた方がよいよ、少年。

少年　　だって、覚えておこうと思ったり、どうしても覚えてしまったり、そんな事が多すぎて、忘れてる間がないんだ。

おじさん　　覚える事は簡単だからな。

少年 そうでもないよ、実際。

おじさん 一つ一つ忘れようと思う実際だってあるんだぞ。

少年 それは、簡単じゃないって言うの？

おじさん おじさんになっちゃうとな、忘れようだったって、忘れられない事の方が多くなるんだよ。覚えることよりも。

少年 じゃ、ずっと覚えておきやアいいじゃない。忘れずに。

おじさん 忘れてしまいたい気持ちがあるってのは、忘れられないってことなんだな、これが。

少年 結局、覚えてんじやないか。

おじさん だから、覚えることの方が簡単なわけよ。

少年 なんだか、よくわかんねえなア。

おじさん 忘れようとしても、忘れられない人の顔、同時に浮かび上がるあざやかな過去、そんなもん忘れられやしないのわかってる。けどだな、いつも、その辺りにまとわりついて見え隠れされるのは、かなわんだろ。

少年 何だかおっかねえ話し？何かに取り憑かれてんの？呪われた過去？

おじさん 5と10と15だな、おじさんの場合。忘れられない数字が増えちゃってな。

少年 5と10と15？あつ、もう、何枚だったか忘れたじゃないか（と重ねた一円玉もう一度数え）僕は簡単に忘れもするなア。

おじさん おじさんの奥さんな、病気で亡くなったのが二月の五日だった。おじさんが大きな交通事故に巻き込まれて大ケガしたのが5月の15日、兄貴が海で遭難したのは、台風の9月10日、そしてまた、今年も新たに忘れない数字が増えそうだ。競馬新聞なんか読んでたりすると、この二頭しか無いなア、なんて思うわけだよ。一点で万馬券取れるな、勝負だなんて。ところが、その二頭の番号が5番と10番だったりすると、何だかイヤな気がして、買うの止めちやったりする。

少年 で、どうだった？

おじさん やっぱり来ないんだ、そんな大穴。

少年 買わなくて良かったね。

おじさん 例え、その大穴入っても、やっぱり買わなくて良かったと思うんだな、きっと。パチンコ屋で大損して、ふと見上げると、台の番号515番だったり、タバコふかすと、フィルターの上に並ぶ数字も気になつて、忘れさせやしないと追っかけて来る様だよ、実際……。

少年 この一円玉、数え終わるの恐くなって来たよ、おじさん。

おじさん いいさ、つきまとわれるのには慣れてんだ。いつものことだから。早いとこ数えちゃいな。

少年 数え終わった時、その数字に僕は一体何を思い出すんだろう……。

おじさん だから、忘れたほうがいいんだよ、少年。

少年 違うんだよ、おじさん。

おじさん ん？

少年 僕がさっき、思い出すよねって言ったのは、

おじさん 何が違うんだい？

少年 こうして、ここの片付けしていると、あのまだ早い夏、同じ様におじさんが食器いじって準備してたことさ。

おじさん ……ああ、まだ、梅雨も明けきつちやいなかったなア。

少年 うん、明けそうでも明けない梅雨が、いつまでも降ったり止んだりしてさ、ちよっと肌寒い午後なんか、このまま夏は来ないんじゃないかなんて思ったけれど、それでも少しづつ夏が近づく気配も感じて、浜の方へ目をやったけど誰もいなかった。

おじさん 長かったな、今年の梅雨は。その分夏は短くて、

少年 でも、暑かった、いつもの年より。

おじさん そう感じたただけだろ。

少年 九月になっても、まだこんなに暑い。(と、西陽を見上げ)

おじさん 週末にはここも閉めるんだから、夏だって終わりだよ。

少年 もう一度来ないかなア、夏。戻って来ないかなア。

おじさん 残暑きびしい今日この頃だから、そんな気なるのはわかるけど。

少年 そうざんしょ。

おじさん 夏の残照ってんだ、ポエムで言うと、そう言うの。皆、詩人だな、こんな季節は。

少年 だって、片付けしているおじさん見ても、僕には片付けてんのか準備してんのか区別がつかないよ。

あの梅雨の一日、早い夏に戻って、また今から夏が始まる気になるんだ。浜には人があふれてさ、あっちこちでラジオからはリズムの違う夏の歌が聞こえ、波の音に混ざって、水しぶきと飛び込んだ水打つ音も上がり、一から夏をやり直しに来る人達が、こっちへ向かう電車の中で大汗かいてひしめき合ってたんだ。車だって全然動かないよ、満杯だもの駐車場は、

おじさん 浜を見てみな。人影もまばらだ。始まるんじゃない。終わって行くんだ、これからどんどん。

少年 終わらないよ。だって覚えているもの、僕は。まざまざと。忘れようとしても忘れられない。それは、終わろうとしても終われないってことだろ。

おじさん そういふ人の記憶とは別の所で、終わって行くものなんかたたくさんあるだろ。住み慣れた家、一緒に暮

らした人、通った道、そこにあった店、忘れろ、終わったんだから。

少年
それじゃ始まってないんだ、まだ。夏は始まってないと思うよ。夏休みってのは、夏に休むんじゃないかな、夏が休んでいたことにして、これから夏が始まるの。休んでたのがむっくり起き出して。そしてやり直す。

おじさん
無理言うなよ。

少年
終わらないよ、この夏は。

おじさん
同じ夏をやり直せるもんか、

少年
まだ、続けよう、この夏

おじさん
見つからなかっただろ！

少年
・・・。

おじさん
同じ夏は二度と来ないんだぞ。やり直せやしないじゃないか。この夏はもう終わる。あの夏やその夏も終わるんだ。どの夏をやり直す気だ？誰かの夏を生きるわけにはいかないし、お前の夏も過ぎて行ったんだ。来年までお休みだ、夏休みだよ。

少年
だって終われないよ、どこかにいる気がして、

おじさん
人の噂も七十五日、また5が出て来た。喉元過ぎれば熱さも忘れ、千夜一夜は夢のあとだ・・・も

う、いくつもの夜を過ごしたろ、あれから。千と一夜を数える頃には、きつといろんなものが終わってる。昔見た夢も遠ざかる。そんな夏もあったよなって、思い出すこともあるだろうけど、その頃には、やり直せる筈もない夏だと思えるだろうし、また新しい夏だって始まんた。

少年

もう、おしまいにしなきゃいけないの？

おじさん

ああ、早いとこ数えちゃってくれよ。端数が千と一枚ならば、それ全部お前にやるから。（と食器を詰めたダンボール持って出て行く）

少年

こんなに暑いんだよ。まだまだ暑い日が続くんだよ。（と数える）もらえないよ、このお金。善意の募金でしょ！・・・あれ？何だろ？誰か来る、大勢で、走って来る。本当に来ちゃった！やり直しに来たよ夏、おじさん！

耳をすませば波音が大勢走る足音、馬の蹄も混じり聞こえ、少年、恐くなって机の下に隠れる。すると、奥に広がるヨシズが倒れ、その向こうに押し入れのフスマ現われる。「ひらけ、ゴマ」の声と共に、四十人の盗賊現れる。しかし四十人いるかどうかはわからない。

盗賊達 どういたしまして！

頭フセイ ン こうして・・・組織の結束は守られ、システムは稼働し、丸くおさまって行くのだが、我々、盗賊団の掟は、そのみにあらず！そんな事は皆わかってるよなア

盗賊達 はい、お頭フセイ ン

頭フセイ ン ここにあるのは、概ね俺の宝だ。概ねってのは、お前達の取り分だってあるって事だ。だがそれは、俺も含めた皆のもんだ。そんなら皆で使おうじゃねえか。

盗賊 1 慰安旅行で、有馬温泉なんかいかがでしょう？それとも、ちよつと足伸ばしてハワイかグアム？

盗賊 2 女買っちゃいけませんか？VIPコースお一人様6万、テレクラでバカ高校生買うんならホテル代ぬきで3万が相場、ちよつとたたけばホテル代込みに。マントル、ホテル、出張サービスなんてのもございます。

他の盗賊達 にイちゃん、遊んでまんナア。

頭フセイ ン ケチくせえこたア言わねえ。皆で稼いだんだ、両方一度にドカーンと、

盗賊達 えっ！

頭フセイ ン 言いたいところだが・・・その前に済ませておかなきゃならねえことがある。お前達が温泉行きてえと言やア連れて行く、女が抱きてえんなら抱かせる。普段の働き見てりや、それぐらい当然だ。ところ

が……損していない、概ね俺のお宝を、人目盗んでちやつかり財布へしまい込んでる者がいる。

盗賊達

衝撃ニ

頭フセイ

分け前は分け前。取り分は取り分としてお前達にもサラリーは払ってるよなア？それで何をしようと俺

はかまわねえ、けれども、決してしちやならねえことがある、そりや何だ！アブドローラ！

盗賊3

俺はやっちゃいねえです、何も！

頭フセイ

お前だとは言ってねえ。カシム！

盗賊4

お頭、ノン・バンクから内緒で借りはしたけれど、毎月ちゃんと返してます。手形なんか切ってます。

頭フセイ

身に覚えのある者は前に出る！今、罪を悔いるのなら許してやらねえでもねえ……

アブドローラ

お頭、そんなふざけた野郎が、この中にいるんでしょうか？

カシム

皆、根はいい奴ばかりです。

頭フセイ

根は悪くねえから質悪いんだ。あのテーブルを見るニ

机の下の少年、ドキッ！

頭フセイ

出かけた時にや、何も無かったテーブルに、何で銀貨が広がってた！損してないと言えるのか、この

オンザ・テーブルのマウンテンとなった銀貨を見ても！

アブドラー お頭、こりゃ、一円玉で、一番価値の低い、

頭フセイ 低かろうが高かろうがマウンテンはマウンテンだろ！銀色してりゃア、銀貨なんだべらぼうめ！

カシム こいつは、アルミでできておりまして、

頭フセイ でも銀色なんだ、こんちくしょう！こんな風に、順調にすべり出してる俺達の稼業。なのに、余計なこととして迷惑かけやがる。やったことはやった。やってないことはやってない。できることはできる。できないことはできない。やっちゃいけないことまで手出して、知らん顔してんのはどこのどいつだ！

それ聞いて、皆、盗賊5をみる

盗賊5 え？俺？あの、僕は僕なりに

頭フセイ マツシタ君は、一生懸命やつてるよ

マツシタ どうも、いつもお世話なってます。

頭フセイ いいか。今日まで働いた俺たちの苦労を思い出せ。盗める物は皆盗み、かつげる物は全て運んだ。見る！どこかのお宅のかた向いた床間まで持って来て、まるで、いつかテレビで見たリサイクルショップの

オヤジだ俺は！そうまでして頑張つて来た仲間なのに、今さらいいお父さんになろうってのはどこのどいつだ！

盗賊達

ええっ！

頭フセイ

フジタ。

盗賊6

はい？

頭フセイ

お前最近、この街のウォーターフロントに部屋借りて女と暮らしてるらしいな？

フジタ

そんな、めっそうもない。

頭フセイ

子供作つて幸せな家庭を作る計画も着々と進んでるそうじゃねえか？

フジタ

誰がそんなことを？

頭フセイ

事務所の奈良さんから報告をうけた。

フジタ

奈良の野郎！

頭フセイ

そう言う事だけは詳しいんだ、あの人。

フジタ

お頭、別にかくれてコソコソ。

頭フセイ

他で仕事取つて、小銭稼いでもいるらしい。

フジタ

趣味が高じまして、今じゃ重宝がられています。

頭フセイ

女と暮らすなどは言わねえ。子供も作れ、住宅ローン組んだって、お庭に芝生植えてもいい。金も送ってやれ。しかし、お父さんにだけはなつちやいけねえ。金さえあれば、ガキは勝手に育つ、女房も笑う。それで世の中うまく行くんじゃないかねえのか？俺達は盗賊を成業とするお父さんじゃねえ！根っからの盗賊なんだ。二歩外に出りや、娘みてえな女を犯し、母親みてえなババアも殺す。いいお父さんにできる稼業じゃねえだろう。

フジタ

すみません。もういい年だし、少しづつ小銭も入ってくるもんですから、そろそろ潮時かなと思っただけなんです。他にもいるよな、そう思ってる奴。

頭フセイ

この隠れ家の秘密を知ってたぞ、お前等全員だ！途中でケツまくれるとでも思ってたのか、そんなこと許したらその銀貨だけじゃねえ、いつ、何時、こっそりと入り込まれて損していない概ねフセイのお宝を、大胸張ってあさはかに使われちまうともかぎらねえ。

フジタ

いや、思っただけです。何となく。一度パパと呼ばれたいなど、カゼでもひいたと思ってください。すぐ熱も下がります。ねえ、俺ってそう言う男だよ。ね、ね、ね、

頭フセイ

フジタ・・・パパにおなり。

フジタ

へ？

頭フセイ

許す。

盗賊達

お頭ニ

頭フセイ

そのかわり、こここのことは忘れる。「開けゴマ」の呪文もそうだ。

フジタ

そう言う男です、お頭。熱がさめた様にすぐ忘れちゃう。執着しない、サツパリした男なんです。

頭フセイ

ただ、何かの拍子にふっと思い出すこともあるだろう。人間だもんなア。

フジタ

忘れっぽい方ですから、昨夜、何食ったのかも覚えてない男なんです。

頭フセイ

クビだ、クビ置いてけ。そうすりゃ思い出したくても思い出せねえ。

フジタ

お頭、そりゃあんまりだ。首の無えお父さんじゃ運動会を観に行けねえ、授業参観だってあるんです。

頭フセイ

(三日月刀抜いて)部下が多いと、誰れが何をやってるのかわからんなあ……。

フジタ

頼みますよ。

頭フセイ

お疲れ様でした。

この声で、皆フジタに掴みかかり、押さえつけ、何度かフセイが三日月刀を握る。気付けば、フジタの首が、ポツンと木箱の上に乗ってる。この間、皆、口々に、「稼ぐぞ、稼ぐぞ……」「働くぞ、働くぞ……」「若い女好き……」「お金はもっと好き……」と叫んでいる。

頭フセイイン　開けゴマ！（フスマ開く）さア、もう一稼ぎだ、パパになったそいつは放っとけ。今、この街は、お宝のマウンテンだニ

皆、出て行き、フスマ閉まる。机の下から少年出て来て。

少年　（フジタの生首見て）うへえ、キモチ悪イ。大変なもん見ちまったよ、おじさん。忘れようだったって忘れられないよ、どうすんだよ、こんな夏、おじさん！

すると、上手の階段から一人の老婆現れ。どこか、おじさんに似たその老婆、チャリンとホルダーの鍵出して。

老婆　迎えに来たよ。

少年　おばあちゃん？！

老婆　ほら、見てごらん（と鍵）当たったんだ。埋め立て地の方だから、ちよつと便は悪いけれど、この際、ゼイタクは言ってもらえないだろ。新しいお家だよ。同じ様なのが100棟ばかり並んでるらしいけど、

皆、境遇は似たり寄ったり、仲良くしなきゃね。

少年 そんな場合かよ。僕、スゲエもん見ちゃった。夢に出て来るよ、きっと。ほら、見てこの生首。

老婆 おじさんから聞いたよ、そりやショックだったろ。もう安心だ。おばあちゃんが一緒なんだから。

少年 違うんだよオ。

老婆 無理もない。すでに火の手があがってたんだから……お前一人で這い出して、一生懸命掘った。仕方ないさ。

近くを通る人達も自分の事でせいっぱいだったんだから。それをうらんじゃいけないよ。

呼べど叫べど知らん顔で、一人ぼっちのお前がどんなに心細かったか、おばあちゃん本当に涙が出ちゃ

う。火の手は、もうそこまで来ていたってねえ、その頃には母さんの声も聞こえなくなっていた。「君

まで死ぬぞ」そう言って近所の誰かがお前かかえて駆け出した。辺りは、アツと言う間に火の海で

少年 違うよ、四十人の盗賊、この街には四十人の盗賊がいるんだ！

老婆 ……かわいそうに、さア、おばあちゃんと一緒に帰ろう。今は眠るのが一番だ。そりや、目をつぶ

れば、その闇の向こうに得体の知れない夢を見ることもあるだろう。でも、眠れば忘れる、眠りが忘れ

させてくれるから。静かにお眠り。

少年 おばあちゃん、見たんだってば。

老婆 どうして私が生き残っちゃたんだろうねえ、まだまだ生きなきゃならない人は、他にたくさんいただろ

うに……。さア、行こう、住めば都、慣れれば天国、雨風防げりや十分だ。掲示板の方にはちゃんと伝言してきたから、きつとそのうちやってくるよ、お父さんも。

少年

……。あの夜、雨が降りそうだから、傘持って駅まで行こうかって言ったんです。どうせ飲んで来るんだからって、終電で来るとは限らないって母さん言うから、二人で布団に入ったの。柱時計が聞こえる薄暗い部屋の中、もうずいぶんお父さんに会っていないなと思いました。帰って来るのは夜遅いし、出て行ってしまふの、朝早く。日曜でもだよ。お母さんはもういないけど、あの時のままなの、お父さんは。壊れかけたどこかの路地で、家に帰る道急いでるかも知れないし、帰るにも帰れなくて、どこかの軒下で僕が傘持って迎えに来んの待っている。あの夜のままでお父さんが立っている。

老婆

……。月日の経つのは早いねえ、もうあれからどれだけ経った？

少年

千と一夜には、まだならないよ。

老婆

もうすぐ梅雨入りだ。夏も来る。暑くなるのかねえ、今年の夏は。なんだかしんどい、おばあちゃんも

……。 (チャリンと鍵鳴らし) 来るといいね、お父さん。

少年

探しに行こう、おばあちゃん。とりあえず駅まで。外は雨かも知れない。きつといるよ、雨ならば。

(と、老婆の手を引きフスマの方へ)

老婆

ちよつと待ちなさい。お買い物だっているいろいろあんのよ。

少年

早く！おばあちゃん。

老婆

わかったよ、わかりましたよ。

と、二人去り、フスマ閉まる。

フジタの首

ケケケケッ！アブドーラ！カシム！

すると、隠れていた二人顔出し。

フジタの首

見たかい？

アブドーラとカシム

バツチリさ。

フジタの首

やっぱりお頭のニラんだ通り、

アブドーラ

後つけて、暗がりには引っぱり込んで、殺っちまおう。

カシム

ガキとババアだ、手間はかからねえ。

フジタの首

バカ野郎！秘密知ってんのはあの二人だけとは限らねえ、他へもしやべってたらどうすんだ！どこに暮

らすのかつき止めて、様子をさぐるんだよ、このノータリン。

アブドーラ なるほど、さすが、フジタだ。

カシム 首だけになるとサエルねえ。

アブドーラとカシム 開けゴマ！

と二人行こうとする。

フジタの首 　　こら、バカ野郎！俺も連れてけ、都合上箱ごと頼む。

木箱ごとフジタの首持って、アブドーラとカシム去る。フスマ閉まる。

フジタの首とアブドローラ、カシムが去ると、上手奥の階段から晩ごはん持って母・兄・妹が降りてくる。下手の床間に茶ブ台出してごはん並べる。上手前の階段からは、ヘルメットをかぶったマスター現れ、テーブルの上の一円玉を、募金箱となっている鍋にいれ、カウンターへ。下手上の階段からはパジャマ姿の三人降りて来てカウンターのイスに座る。

マスター　いやー、スゴかったねえ。

パジャマ三人　びっくりしたよ、そりや。

マスター　ごめんね、水出ないの。コーヒー入れる分しか無いんだよ。

母　（床間から）すいませんけど、こっちは勝手にやらしてもらいます。

マスター　ああ、どうぞどうぞ、お互い様ですから。

兄と妹　いただきまーす。

マスター　ドカーンで、ゴゴゴゴ、グラガシヤグラガシヤ、ズズズドーンだろ。

パジャマ1　僕は、ズダーンしか覚えてないんですよ。

パジャマ2　私ね、バンツ！てのはわからなかったん、寝てたし、だけど、その後は、ガツチャンコガツチャンコで

ドスンドスのガランガラン、ゴーンやったわ。

パジャマ3 うーん・・・俺は、ベベベと来てシユシユポポシユシユポポ、ドンドコドン、ドンドコドン、パ

ー！だったなア。

マスター そうかなア、俺は、ピーヒャララピーヒャララで

パジャマ1 そうじゃないでしょ、シユルシユルシユル、ドパパンと来て

パジャマ2 何言うてんねん、パソコンパソコンのジーンジーンやで

パジャマ3 やっぱり、チーチーパツパ、チーパツパの

マスター そりやおかしいよ、ねえ津村さん。（と、床間の家族へ）

母と兄と妹 あれは・・・オーシ、ツクツク、オーシ、ツクツク、ハラミーヨ、ハラミーヨ、ヨーヨーヨーでチヨ

イナチヨイナだったと思いますよ。

マスター ・・・・まア、皆、あわててたからねえ、よく覚えてるって言えば覚えてるし、覚えてないって言えば

覚えてないよ、本当の所。

パジャマ1 あの時のまんまだよ、ほら、寝てたんだから

パジャマ2 あの直前まで起きとってん、着替えて寝るんやなかったわ。こんなことになんねんやったら、なア。

パジャマ3 うん。しかし、えげつないねえ、そのネグリジェ。

パジャマ2 （下はショートパンツスタイル、上は、ヘソが見える様なスケスケだ）これが、かわいいの。

マスター
うちは喫茶だよ、何か、あんたカウンターにいとピンサロみたいだねえ。

パジャマ2
しゃあないやん。着の身着のまま飛び出してんから。

兄
普通はそうなんだよな。母さんだけだよ。あの状況でそんなコート着てたの。

妹
なんだか妙な感じよ。一人だけ毛皮きて給水や食料の配給に並んでいると。

兄
イヤミだよ。皆大変なのに一人だけミエ張ってるみたいで。

母
何かの時に売れるでしょ。燃えなかったただけラッキーじゃないの。

妹
もっと他に持って出る物あったんじゃない？

母
我を忘れて手ブラで飛び出すよりましでしょ。お母さん、これ着るの夢だったんだから、やっと買ったんだから、買って何度も着てないんだから。

兄
母さん、脱ぎなよ、ごはんの時ぐらい。

母
母さん冷え性だから、すぐ風邪ひくからね、こういう時に病気になるとタチ悪いでしょ。

妹
母さん、もう梅雨よ。

母
さっさと食べなさい、私のことはいいから。明日は食べられるかどうかかわかんないのよ、これだっていつまで着ていられるか……何度も着てないのに。

妹
毎日着てるじゃない、あれから。

兄

・・・何かあったら本当に売る？

母

黙って食べてよ。

この間に、カウンターではコーヒーを出している。

パジャマ1

いつごろ始まんのかなア、大学。ろくに通ってなかったけれど、こんなことになるよ、行きたいんだよ

な、何だか。

パジャマ2

友達皆、どないしてるんやろか、どこに住んどんのかわからへんもんなア。

パジャマ3

寮はつぶれちゃたらしいよ。皆追い出されたって。

パジャマ2

助かったわ。頼んなくても、同じマンションにあんたら住んどって、裸足で飛び出したやんか、長靴で

も無いよりはましやんなア、ありがとう。

マスター

下手すりゃ裸で飛び出しかねないよ。あんたみたいなのは。

すると、上手前の階段から素裸で前だけタオルでかくした若い男出てきて。

若い男　　いやー、まいったまいった。

マスターと。パジャマ3　ウワツッ！

若い男　　風呂入ってる最中だったもんねえ。ドドド、ザブーン、ドンブラコ、ドンブラコ、ピチャピチャ、チャ

ツプンだもの。(とカウンターの前のテーブルに座り)　コーヒー。

マスター　　いや、いたとは思うよ、そういう人もかなり。

若い男　　パンツぐらいはときや良かったなア。あのね、元々、この辺に住んでたわけじゃないんですよ。たま

たま、たまたまね。

マスター　　ちゃんと握ってて下さいよ。困るよ、店中でそんなもん放り出されちゃ。

パジャマ3人　　まあ、こういう時だから仕方ないけど。

若い男　　いや、たまたまね、友達のところ泊まりに来てたんですよ。そしたら出くわしちやって。素裸で寝る

習慣ついてるもんだから。

マスター　　風呂入ってたんじゃないの？

若い男　　えっ？ああ、そうそう、風呂入ってベッドに座ったところだったんだ確か。ほら、ワンルームだからさ、

ベッドなんか置いたら逃げ場ないじゃない、俺の方が上になってたもんだからさ、いろんなもん落ちて

きて背中直撃だよ。下からはしがみつかれるし。

マスター 座ってたんだろ、ベッドに。

若い男 ん？ああ、そうだった、そうだった、座ってベッドへ入ったところだったんだ。そういえば。違うよ、違う違う、何もしてないって、寝てたんですよ、あの時間なもの。

マスター ベッドへ入ったところだったんだろ。

若い男 すぐ眠っちゃったの、寝付きいい方だから、あつと言う間に、ぐっすりと、疲れてたのかなア……。

パジャマ2 疲れるようなことしてたんちゃうの、朝方に。

若い男 してないよ、さすがに聞かないよ、いくらなんでもそんな人の話。

マスター いや、いたと思うよ、そういう人もかなり。

すると、下手奥の階段から、リュック背おった女性登場

リュックの女 すみません。

マスター はい？

リュックの女 この辺、なんだか道が入り組んでて、迷っちゃったみたいなんです。

マスター メチャクチャなんだよこの辺。そう簡単には元へ戻らんとするけどね。どこ行きたいの？

リュックの女 どこでもいいんです？

マスター うん？

リュックの女 何かお手伝いができればと、私にできることがあればと思って、

マスター 何だ、ボランティアの人？

リュックの女 とりあえず、下着とか水とか足りないって聞いたもんですから、

マスター あ、そりゃ助かるわ、水。こっちの人にパンツあげてくれない。

リュックの女 はい。良かった、来たカイがありました。

マスター でも、それ置いたらコーヒー飲んで帰ってね、他へ行つてよ、ここはいいから。コーヒー代はもらうよ。

それ一番助かるから。

リュックの女 はア・・・、あの、ここ、一体どうなっちゃってるんですか？

マスター どうってことないよ。うちは三階だったんだけど、下はつぶれちゃってね。二階だったお隣りも下はく

ずれちゃって、タテに半分にもなっちゃって、うちの方へ傾いて来ちゃったの、床間だけになって、

母 良かったわよ、でも。半分だって住む所残って。

兄 それは言えるね。

妹 公園のテントじゃ暮らせないもの。

マスター 裏のマンションの非常階段やら何やらも突っ込んで来て、

パジャマの3人 裏の者です。

マスター アバンギャルドな空間になっちゃったね、何だか。別に下手なデザイナーのプランじゃないのよ、あんまりリアリティー無いつつても。しかし、どうしようかなア、屋根無くなっちゃったもんなア、これから梅雨だつてのに。

リュックの女 はア、そうなんですか……。

すると、下手の床間の窓から、近所の奥さん二人と女子大生入って来て。

奥さん1・2 奥さん、ちよつと失礼しますよ。

母 あれ、まアまア、気をつけてよ、傾いてるから。

奥さん1 それ、どこでもらつて来たの？ 駅裏の公園の炊き出しロクなもんないのよ、おにぎりとうどんだつて。バカにしてんじゃないの。

奥さん2 あれから、少しは経つんだから、もう少しましなもん出せないのかねえ。

母 こっちだつて、これ三日間同じメニューよ。まア文句言っちゃいけないけどさア。

奥さん 1 もう今日は通んないから、最後だから、

奥さん 2 明日はちよつと朝早いかも知れないけど、ソ〜つと出て行くから、起こさない様に、

母 いいのよ、こう言う時はお互い様なもの。

奥さん 1・2 そりじゃね。

と三人で階段の方へ、

リュックの女 この人達も？

マスター うん、裏に住んでんだけど、ここ通らないと部屋へ帰れないのよ、路地が埋まっちゃってるから、通りにも出られないの。

リュックの女 へえ……。。

すると、女子大生、リュックの女見て、

女子大生 あれっ？奥尻にいた人じゃない？救援物資の仕分けしてた。

リュックの女 わあー、久し振り、

と、二人手を取り、

女子大生 いつ来たの？

リュックの女 きのう。

女子大生 私なんか次の日からよ、もう血が騒いじゃってさ、じっとしてらんなかったのよ。

リュックの女 雲仙の時はね、私も飛んで行ったんだけど、ほら、ここはなかなか情報が入らなかったでしょ、お役所の不手際だよね、あれはやっぱり。

女子大生 奥尻ん時に、ベルギーから来たって言う金髪の人いたじゃない、

リュックの女 ああ、あのちよつとカッコイイ人？

女子大生 来てるってよ、市役所の方で食料配ってるって。

リュックの女 本当？

女子大生 あとね、その体育館には、あん時のリーダーとサブリーダーがいて、公園では協会の人がパソコン通信使って人手の足りない所紹介してくれるって。

リュックの女　じゃ、そこ行ってみるわ、よし、私もガンバルゾ！

マスターとパジャマ3人　ガンバってね……。

リュックの女　そんじゃ、まずはコーヒー飲んで、気合い入れよう、気合い。

マスター　その元気の良さが鼻につくんだよな、こつちとしちやア。

リュックの女　マスター、いい匂いです、これ。

マスター　ああ、そう。

奥さん2　私も一杯ちようだい。あの頃はコーヒーだって飲めなかったんだから、少しは戻りつつある喜びを味わ

ったって、バチ当たらないでしょ

奥さん1　そんじゃ、私も。あんたも飲みなさい、ごちそうしてあげるから。

マスター　適当に座って、空いてるところへ。

母　奥さん所大丈夫？何だか夜になるとスコップやツルハシ持って来て、金目のもん持って行く火事場ドロ

ボウみたいなのが大勢いるって言うじゃない。

奥さん1　うかつに親戚の家なんか世話になれないわよ。

奥さん2　例え住めなくなたって、近くにいないとき、見張ってないと持って行かれちゃうらしいよ、何でもかんでも。

マスター　こうなると、善意にあふれてんだか、悪意に満ちてんだかわかんないね、この辺りも。

女子大生　私達の仲間がいますから。夜の見回りも組織してます。

マスター　善意が一番迷惑だったりすることもあんだよ、ちよくちよく。

リュックの女　（コーヒー飲みながら、ずーっと思いつめたように気合いを入れていた）うん、そうだそうだ。何かできるはずだ、来て良かった。（とまた思いつめた様に）

マスター　・・・なんだか溜息出ちゃうなア、

兄　いつかは、こんなこと起きるんじゃないかなアって思ってたのよ、本当の所。いや、思ってたただだよ、だからって何の準備もしてなかったけどね。何かドカーンとき、ドンデン返しが来て、全て御破算になっちゃう様な、

母　やめてちようだいよ、他人事みたいに。

兄　やれ戦争だ、天災だ、ってニュースじゃ見たけどさ、関係なかったもん、俺達。わりとスムーズにきちやったでしょう、ここまで。

母　そんなことないわよ、育てた方としては。

兄　正直言うとな、心のどっかで期待してたよ、何か起きるの、ちよつとワクワクして。台風だつてさ、いざ上陸すると、山崩れたり、人が死んだりするけれど、ちよつと楽しみじゃない、どんなの来るか。

パジャマ1 そりやありますよね、世間体気にせずになんか言わせてもらえば、

母 あんた達、何人死んだと思ってるの！

兄 母さん、今だから言えるけどって話だよ。

母 これからどうするってのよあんた！家こんなになっちゃって、もつと悲惨なお宅だって数え切れないよ！

兄 いいじゃない、家庭内の話しなんだから、よそへ行ってこんなこと言わないから。

妹 どっから内でどっからよそだかわかんない、私。

マスター (奥さん達にコーヒー出しながら) 世紀末ってことですよ。行きつくところまで来たね世の中も。終末と
言う希望、その後に復興と言う絶望だよ。誰が背おうのかねえ、その絶望の方は。

若い男 ガンバンなきやいけないね、やっぱり僕達が。

マスター パンツ一丁でかい？

パジャマ3 裸一貫、一から出直しですよ。

マスター ……何か欠けてるね、この世の中。

パジャマ2 説教臭さなつたんちやう？マスター。それやったら、こうなる前から説教しとけ言うねん。行こか？

とパジャマの三人、コーヒー代置いて元の階段登って去る。

若い男 やっぱりズボンも欲しいなあ、パンツはいちやうと。

女子大生 役所で山積みみんなってますよ。送られて来た古着。

若い男 じゃ、もらって来ようかな、ごちそうさま。(と去る)

リュックの女 よし、気合入った。やっぱり歌だよね。皆を勇気づけるには。体育館にオルガンあった？

女子大生 あったと思うけど。

リュックの女 決めた。ここ置きます。(とお金テーブルに置き、「そして神戸」を歌いながら去る)

女子大生 そう言えば、あの時は「知床旅情」だったわ……。

奥さん2 さ、行きましょ、帰ったら帰ったでやることたくさんあるんだから。ごちそうさん。

と奥さん1・2と女子大生、コーヒーカップをカウンターに返して去る。

マスター (それ見送って)……津村さん、やっぱり何か欠けてるよね、世の中。俺も新しい商売考えないと

な。まずは、屋根が欠けてんだよな、切実な問題として……もう、閉めますわ。そんじゃお先に。

(とカウンターの奥へ)

母 あっちこっち欠けちゃってるわよ、これ一間しか残んなかったんだから。

妹 よりにもよって、何でここだけ残ったんだろう。台所とかさ、応接間とか残ってくれば良かったのに。

兄 役に立たないわよね、残ったのがお父さんの部屋じゃ。釣り道具とかゴルフクラブとか必要ないもの、こんな時に。

母 生活に必要なものが見事に欠けてるね、この部屋。

兄 うん、やっぱり欠けてるわよね、何かが……。

妹 母さん脱ぎな、それ。暑苦しいよ、どう見たって。

母 私もそう思う。

兄 わかったわよ、風邪ひいたら面倒見てよ。(脱ぐ、すると、お父さんのラクダのシャツを下に着ていた)
うへ！

妹 母さん、それお父さんのじゃない？

母 暖かいんだ、これが。

兄 よしなよ、もう。汗かいてんじゃない。

母 健康にいいのよ、発汗は。

妹 冷や汗出るなア、そんなかつこうで表歩かれちゃ。

母 何かが欠けてんのよ。とりあえず、いろんなもん身につけとかなきゃ不安でしょ。

兄 そりゃ、わかるよ、何か欠けてるって気持ちさはさ、けどね。

妹 お父さんだってイヤがるよ、そんなの着てる母さん。

母 そうかなア、

兄 欠けてるよ、父さんに対する配慮が……。そうだろ、父さん？

三人顔を見合わせ、

母・兄・妹 ……って、父さん欠けてるじゃない。

母 あらやだ、気が付かなかった。

兄 おい、いつから居なかった？

妹 さっきまでいたでしょ、

母 一緒にゴハン食べてなかったっけ？

兄 あれ？食べてたっけ？食べてないよ、僕らしか。

妹 夕方、ゴルフクラブ磨いてたけど。

母 そりゃ、先週の話でしょ

妹 じゃ先月だったかな、磨いてたの。

兄 そう言えば、ずい分会ってないんじゃないか？昨日の晩メシん時もいなかったよなア、

母 いたわよ、

妹 いなかったわよ。

母 あら、それじゃ、あれも先週だったかしら？

妹 先月だったんじゃない？確か、

兄 去年いたっけ？父さん、

母・妹 去年？・・・どうだっけ・・・？

兄 いつからいなかった、父さん・・・？

母 ちよっと、捜して来てよ、一体どこ行っちゃったんだろう。思い起こせば、いざって時にいないねえ、

妹 あの人は、

妹 どうでもいい時には邪魔な程ゴロゴロしてるのに、

兄 うーん、・・・万博には連れてってもらったよねえ。

母 相当昔だよ、それあんた。

兄 あれから、会ったっけなア？

母 何言ってるの、

兄 父さんとはぐれてさ、あの人混みの会場で二人して迷子になったら、

妹 ああ・・・ずい分昔だけど、

兄 あれから会ってねえんじやねえか、あそこでハグれてから・・・。

母 バカなこと言ってるんじゃないわよ。ちよつと、捜してよ、捜しに行つてよ、

母・兄・妹 お父さん、

と言つて、バラバラに去る。

くピアガーデンく

階段という階段、出入口という出入口、およそ人が出入りできそうな所から、会社帰りのお父さん達が現れて、大ジョッキ片手に歌い出す。気づけば、ちょうちんは連なり、月も出て、そこは屋上ビアガーデンだ。

(歌) 回り道して、寄り道をして

ルルルルルル・・・

遠回りして、道草食って

ララララララ・・・

足も向かなきゃ、気も向かないのは、

寄る年波の夜に知る、千夜一夜の物語

ウオウウオウ・・・

話してちょうだい、眠らぬように

見る夢なしに目をつむる、忘れさせてよそんな夜

ウオウウオウウオウ・・・

回り道して、寄り道をして

ルルルルル・・・

遠回りして、道草食って

ラララララ・・・

よく見れば、皆、あの四十人の盗賊の一味の様な気がする・・・。

会社員 1

やっぱり夏はこれだな、この一杯がないと、夏だって気がしないなア、不思議に。

会社員 2

クーツ！生き返るね、生きがいだね、やめられないね。

会社員 3

つつい寄っちゃうんだよな。電車降りるまでは一直線に帰ろうと思ってたのに

会社員 4

プハー！キクーツ！

会社員 5

生きてて良かったー！

会社員達

ジョッキでやるのが、またいいんだな、なかなか減らなくて、

しみるねー！

会社員 1

こりやね、俺達がいけないんじゃないやありませんよ。駅前にはビヤガーデンがあるのがいけないの。ダメだよ、

こんな目立つ所に作っちゃ。毎晩寄っちゃうよ。本当は真っすぐ帰りたいのに。

会社員 2

恨むね、ビヤガーデンなんて思いついた奴を。

会社員 3

憎むね、駅前なんかを開店した奴を。

会社員 4

怒るね、ちようちんなんかで誘った奴を。

会社員 5

ノノシルね、枝マメなんかゆでた奴を。

すると、カウンターの奥から、枝マメとジョッキかかえた、あのマスター出て来て

マスター

思い切って良かった、ビヤガーデンなら屋根無くても平気なもの。屋上だと思やいいのよ。逆転の発想

だな、商売ってのは、これだな。

会社員達

憎いよ、マスター！

会社員 1

やっぱり俺達がいけないんじゃないよ、ダメだよ、天気も。さっきまで降ってたのに、止んじやうんだ

もの。梅雨の晴れ間って言うの？月なんか出ちゃうんだもの。

会社員 2

そりゃ、飲んじゃうよな、どうしたって。飲むなって言う方が無理だよ。飲んじゃうよ誰だって。

会社員 1

もうすぐ夏でしょ。夏休みでしょ。やれ海だ、山だって、こう言う時だけだよ、お父さん人気あるの。

もういいんだよ、海も山も。俺達は子供の頃にさんざん行ったんだから、もう行きたくねえよ遊びになんか。

会社員 2

忙しい方がいいよ、夏なんか。どこ行ったって人・人・人だよ。疲れに行く様なもんでしょ。仕事しての方が楽しいよ、本当。

会社員 3

勝手に行きやアいいのよ、金やるから。休んだよ、遊ぶんじゃねえんだよ、夏休みつてのは。

会社員 4

何でわかんねえのかねえ、そんな簡単なことがさア。

会社員

てな事言って飲んでんだな、今日も。

マスター

盛り上がってるとコスンマセン。もう終電行きましたんで、ラストオーダーですけど、ヨロシイでしょか？

会社員 1

あ、そう。終電行った？もう。

マスター

ええ、ついさっき。

会社員 2

そうか、じゃボチボチかな……。

と、会社員達、盗賊の覆面を準備する。

会社員1 それじゃ皆さん、これ飲んだら行きますか？なかなか減らないけど、

他の会社員 そうしますか、いい時間だし。

と、覆面つけて。

すると、傘持ったあの少年、上手の階段に現れ、

少年 お父さん？（と呼んでみたりする）

会社員とマスター ん？

少年 ・・・来てないでしょうか？持って来たんだけど、傘。

マスター もう終電も行ったよ。入れ違いに帰ったんじゃないの、降ってないし、今は。

少年 なんで止んじゃうんだろう。迎えに来るといつも。トタン屋根を打つ音聞いていると、同じ様に父さんも、

駅の階段やタバコ屋の軒下で、冷たい雨音聞いている気になって、二本つかんで外へ出ると、いつの間に

か止んじやうんだ、いつだって。

マスター 梅雨だからね、降ったり止んだりは常だよ。

少年 さっきまで降ってました。

マスター そんなじゃ、待ち切れなくて駆け出したんじゃない？雨ん中。もう着いてるよ、家に、

少年 埋立地の方へ引越したから、父さん知らないんです。僕等がどこに暮らすのか。

マスター ずい分遠いね、じゃタクシーだ、その辺でタクシー拾って、

少年 いえ、降ってます、まだ。父さんの上にだけあれからずーっと……。だから、帰ってこれないんだ。

父さんは、雨の檻の中にいる。どこまでも続く水の鉄格子を抜けられずに、こうして僕が二本持つて迎えに来るのを待ってんだ。例えば、崩れかけたアーケードや路地、駅の階段やタバコ屋の軒下、この街のどこかで待ってます、きっと。

マスター、行くわ。

と会社員、思い思いに去って行く。

マスター 君は帰れるのかい？自転車？降って来るぞまた、早くしないと。

少年 父さん？

マスター うん？

少年の視線を追うと、一番奥のテーブルに、会社帰りの姿ではない、何だか日曜日のお父さんみたいに、スラックスにシャツ、中にはランニングシャツがのぞき、涼しそうな帽子をかぶった男がいる。

マスター お客さん、意地悪しちやいけないよ、せつかく迎えに来てくれてんのに。

男 もう一杯もらっちゃダメ。(とマスターの方に顔を上げ)

マスター 帰りなよ、迎えに来てんだから。

少年 ……ごめんなさい……。

マスター え、違うの？

男 もう、おしまいかア……。(とジョッキ置く)

少年 おじさん、良かったらこれ使ってよ、二本持って帰るの面倒だし、どこか似ていたおじさんに貸しとくよ。見かけたらまた貸してあげて、おじさんみたいな誰かに、

男 いいよ、おじさんまだ帰らないんだ。

少年　でも降りそうだよ。

男　すぐ近くなんだ、帰ろうと思えば、

少年　じゃ帰りなよ、待ってるよ、家じゃ。

男　足も向かなきゃ、気も向かないんだ、何だか。

少年　おじさん所もつぶれちゃった？燃えちゃった？

男　うん、おじさんの部屋だけ無事だった。

少年　運が良かったね、

男　どうだかなア、

少年　どうして、

男　おじさんな、食べちゃうんだ、

少年　運を？

男　うんこなんか食わないよ、

少年　うんこじゃないよ。

男　食べちゃうんだよ、家に帰ると、

少年　・・・お腹減ってるの？

男 昔な、アラビアの方に一人の王様がいてね、そりゃきれいなお姫様をお嫁さんに貰うんだけど、朝になると、あとかたもないんだ、お姫様。

少年 どうして？

男 食べちゃうんだな、王様が夜のうちに。

少年 ゲエツ。

男 また新しいお姫様お嫁にもらうんだけど食べちゃう、何人来ても食べちゃうんだな夜のうちに。いなくなっちゃうんだ。それで、アラビアにはもうお姫様が三人しかいなくなっちゃう。よせばいいのに、そのうちの一人がやっぱりお嫁さんに行くんだ。

少年 食べられちゃうじゃないか。

男 お嫁に来た初めての夜、お姫様は食べられるその前に、お話しを一つ聞かせるんだ、王様に。

少年 うん。

男 そのお話が、なんだかすごく面白くてな、王様は夜明けまで聞き入っちゃう。あんまり面白いんで、明日の夜まで食べるのやめと思うんだ。それで次の夜が来るだろ、また別の話をお姫様は聞かせる。これがまた面白いんだな、ものすごく。で、王様、またお話してもらいたくて食べるの一晚のばすわけだ。

少年　それで何日目？食べられちゃったのは？

男　一日、また一日と月日は流れ、千と一夜になるわけだ。

少年　ついに話もつきて？

男　その頃には王様も、お姫様のことが大好きになってな、幸せに暮らすんだ、食べたりせずに。

少年　なんだ、ハッピーエンドかよ。

男　おじさんの方は、そうは行かないんだな。食べちゃうよ、きっと、家に帰ると。だから倒れるくらい眠くならないと帰らないんだ。食べる間もなく眠れるくらい疲れちゃわないと。

少年　話も聞かせてくれないの？帰っても。

男　聞きたくもない話なら、たくさん聞くよ。聞いてもいないのに。

少年　おじさんの方が話しなよ、面白い話。

男　おじさんの話は面白くないんだよ。たとえ話してもわからんだろうし、

少年　ふーん……。 (傘開いて、おじさんに差しかけ)

男　何だよ？

少年　雨ん中にいるみたいだよ、おじさんだけ、おじさんの上だけに降ってるみたいだ。

男　……。そういう話は、つまらんだろう、話しても……。ありがと、借りとくよ。(と傘、肩にかけ)

少年

貸してあげてね、似た様な人みかけたら、いつか、僕の所へ帰って来そうな気がする、その傘と一緒に
(と去る)

男

……いつ明けるのかなあ、梅雨……。

すると、カウンターに残っていた最後の客四人が振り返る。フセイン、アブドラー、カシムにフジタだ。フジタは切り離された自分の首を胸の所にかかえ。

アブドラー

あの小僧でさ、お頭。

フセイン

間違いねえんだな。

カシム

ええ、この目でしかと。

頭フセイン

で、首尾は。

生首フジタ

抜かりはありません、お頭。跡をつけ、埋立地の家つきとめて、しっかりさぐり入れとききました。同じ
ようなのがいくつも並んでやがるんで、間違えないようにちゃんと印もつけましたよ。ケケケ。

頭フセイン

他に知ってる者はいなかったのか？

アブドラー

あの小僧のババアが一人。

カシム　それ以外、知る者はねえようです。

生首フジタ　心配いりません。この梅雨が明けりやあ、放つといたって死んじまうようなババアです。真夏になりや、

老人の暮らせる所じゃありません。あんな炎天下の埋立地。

頭フセイ　善は急げだ。仲間集めな、夜が明ける前に始末しちまうんだ。概ね損しねえうちにな。

と四人出て行く。

マスター　もう閉めますよ。終わりだよ。(と奥のテーブルの男に声かけ、カウンターの奥にきえる。)

く万博く

ビヤガーデンに男一人。鼻歌まじりに、どこで時間をつぶそうかと立ち上がると、そこへ、兄と妹。

兄　何だよ、父さん、傘なんか差して。

男 うん？降って来た時の為にな、

妹 降らないわよ、いいお天気じゃない。

男 もし降っても、お前等迎えに来てくれないだろ、傘持って。

兄 行こう、こんな所にいないで。

男 いいよ、俺はここにいるから、お前等、好きにしろよ。

妹 違うのよ、お父さん代わりに並んどいて、

兄 スゲエ行列なんだ、月の石。俺達そっち行ってるから、父さんソ連館の方並んどいてくんない？ロボッ

ト館の方がすいてたら、そっちでもいいや。

妹 えー、ソ連館が見たい。

兄 頼むよ、この調子じゃ人が多すぎてさ、一日に何館見れるかわかんないよ。

男 勘弁してくれよ、お父さんここにいるから、自由に遊んで来てくれよ。

妹 一緒に行こうよ。夏休みは遊んでくれるって言ったじゃない。

男 一緒じゃないだろ、お前等のかわりに並ぶんだから、イヤな顔されるぞ、入れ換わると。他の人だって

長い時間、並んでんだから。

妹 お父さんのお父さんもそんなだった？何だか疲れちゃってさ。

男 おじいちゃんか？ああ、おじいちゃんは、恐かったなすごく。優しかったけどキビしかった。

兄 でも、並んでくれたでしょ。こう言う場合。子供達の為にさア。

男 どうかなア、おじいちゃんは、ヒョウだったからな。

兄と妹 ん？

男 黒ヒョウ。

兄と妹 え？

男 おばアちゃんは狼だった。

兄 何だ、それ？

男 父は黒ヒョウ、母は狼、俺は森の中で獣に育てられ、

兄 ジャングルブックかよ！

妹 もう聞いたよ、その話。ずい分昔に。

男 幼なじみの熊もいてな、人を食ったトラと戦うんだ。おろかなイギリス人もやっつけて、

兄 ここはジャングルじゃないよ。野性の掟が通用するかよ。

男 そこが問題だよな、面白かったお話が皆通用しなくなっちゃうんだもんな、つまんねえ話になっちゃう

もんなア。

妹 本当のこと言うと、つまんないよ、お父さんの話し、最近。

兄 子供じゃないんだからさ、つまんないよ、父さんといても。

男 ……そうだよな、俺じゃ食われちゃうな。千と一夜になる前に。

妹 母さんなんか、一人で走り回ってるよ。朝からスカンジナビア館でバイキング食べてた。

男 たくましいなア、母は。うらやましいよ。

妹 父さんも、そうなりなよ。それでも黒ヒョウの子？

男 だったんだけどね。昔は。いつからこうなっちゃたんだろう？ジャングルがなつかしい。

妹 母さんなんか、こうだよ、こう（と大げさな手招き）遠くから、ここ入ここ入れ叫ぶんだよ、フランス館の前で、あんまりアカラサマで赤面する、こつちが。

男 そりやそうだよ。自分の一部みたいなもの、自分のお腹痛めて生んだんだから。不変だね、永遠だね。俺なんか気持ちいいことしかしてないんだから。生まれた後に、父親の存在構築して行かないやなんないのよ。ここがジャングルならば、黒ヒョウでいられるんだけど……。お父さんて何だか変形して行くな、時代と共に。野性の掟が経済の掟になっちゃったもんな、急激に……。

兄 （それまで、辺りを見回していた）しかし、ここスイてるねえ。何館？ここ。

男 近未来館。

兄 汚ねえ近未来だなア。ゴミ捨て場じゃねえの。

妹 いやだな、私。こんな所で暮らすの。どこが内でどこが外だかわかんないじゃない。

兄 大丈夫だよ。SFだよSF。例えこうなっても、それまで生きてないから俺達。

妹 どうしてよ。

兄 一九九九年の七の月には、空から恐怖の大王が降りて来て皆死ぬの、地球は終わるんだ。今まで全部当

たってるらしいよ、その予言。だから、何しても無駄なんだ。この万博だって無駄なんだ結局。

妹 私も？

兄 俺もだよ。母さんも父さんも。

妹 恐いなア、そう言うの。

兄 平気、平気、それまでには科学も進歩するし、何とかなるかも知れないし、まだ三十年近くもあるんだから、遊べるよ、それまでには十分。

妹 私の子供は？私は十分遊べるけれど、お嫁に行つて、赤ちゃん生まれても、その子には十分遊ぶ時間は無いの？

兄 知らねえよ、いいじゃないかよ、そんな事。空から大王が降つて来たつて俺達のせいじゃないんだから、遊ぶ時間無くたつて仕方ないよ、責任ないよ俺達には。しょうがねえだろ、皆死ぬんだから。

妹 生き残っちゃったらどうすんのよ。

兄 皆、死ぬの。

妹 そう言いながら、お兄ちゃん自分は何故か助かると思ってたんでしよう。

兄 知るかよ。生き残っちゃったらしようがねえよ、生き残っちゃったんだから、その頃には、科学も進歩してるし、何とかなるんだよ、平気だよ。

妹 私はどっち？

兄 だから皆死ぬの。

妹 お兄ちゃんは生き残るの？

兄 だから、生き残っても平気なんだよ、その頃には、

妹 じゃ皆死なずにすむのね。

兄 いや、地球は終わる。

妹 どっちなのよ。

兄 いいじゃねえかよ、どっちだって。関係無えよ、俺達には。無駄なこと聞くなよ、

妹 今日はどうすんの？死ぬこと考えて生きるの？明日も生きる為に今日を生きるの？

兄 今日月の石を見るの！

妹 月の石は何故見るの？死んじゃうから今のうちに見ておくの？夏休みが終わったら友達に話すために見

るの？私の赤ちゃんには話してやれるの？やれないの？

兄 その時になんなきやわかんないよ。

妹 その時生きてる？死んでる？

兄 知らないってば、

妹 本当に、ここみたになっちゃったら？

兄 死んでるよ、ここみたになっちゃったら、死んでる死んでる、そうしようよ、死んだ方がまだよ、

楽だよ！

男 子供のくせに、死ぬ死ぬ言うんじゃない！何なんだお前等！……お前等、ちよつとそこへ座れ。

と兄・妹、中央の階段にちよこんと。

男 ……（兄と妹をひっぱたく）……（そして去る）

そこへ、窓から母。

母 いた？お父さん。

兄 最近、自分の親にもひっぱたかれたこと無い奴、たくさんいるらしいよ。

妹 どこ行っちゃったんだろう、お父さん。

母 もう寝ましょ。そのうち帰ってくるわよ、朝になったらいつの間にか布団に入ってたんだから。

妹 そう言えば、あれ以来会ってない気がする。お父さんと。

母 お月さん出てるうちに帰ろ。降って来ないうちに、

兄 あれ以来取りに行かないね、月の石。何かの役に立ったって話しも聞かないし、だいたい月に着陸しないもんね、シャトルだって。無駄だったのかなア？・・・無駄だってわかったことが重要なんだな。

何の役にも立たないってことがわかったって事が、今になると。無駄になるもの多いねえ、何だか。

妹 もう少し捜す？

母 無駄だとおもうけど・・・

母・兄・妹 父さん・・・（と捜して去る）

〔夜、得体の知れぬ眠り〕

父さーんと呼ぶ声と共に母・兄・妹が去ると、父さーんと呼ぶ声と共に少年現れ。その後からあの老婆も。

少年 父さん？父さーん……。〔と捜す〕

老婆 〔中央の階段にちよこんと座り〕落ちた高速道路の太い橋脚があるだろ？おばアちゃんあその下も見て来たけれど、やっぱり、立ってなかったよ、お父さん。崩れた埠頭や波止場、倉庫街の軒下も見に行った……。月日の経つのは早いねえ、あれからどれだけ経った？何だか、しんどい、おばアちゃん……。。

少年 もう帰る？

老婆 忘れようとしても忘れられないのはよくわかる。無理もない。そう思うよ。おばアちゃんも。でもね、忘れたい、もうおばアちゃんは……。。

少年 じゃ、ちよつと待ってて、空はもう少しもちそうだ。誰か捜して貸して来る、これ。いつか帰って来る様に、一緒に。〔と、去る〕

老婆 ……傘なんか帰って来るもんか。今じゃみんな使い捨てだよ。雨の日以外は用無しなんだから。あ

りがたくないさ、その辺にいくらでも忘れられてんだから、埃かぶつて。ああ忘れてた、蚊取り線香買ったっけ？ああ、忘れちゃった。海を背にして何番目の路地に入るんだっけ？南側の海でしたかねえ、東側だったかしら。埋め立て地だから、回りは全て海だったかしら？夕陽はどっちに沈んだのかしら？
．．．降りそうだね、また。月も見えない。．．．何を覚えていて、何を忘れたんだか．．．
なんだかわからなくなっちゃったよ。．．．先帰る、おばアちゃんは．．．。(と、ゆっくり立ち上がる) 何だか、しんどいねえ．．．。(と、また座る)

すると、フセインの声、「開けゴマ！」奥の押し入れから四十人の盗賊達走り込んで来る。老婆ひつつかんで二・三人が押さえ、

頭フセイン

ほーれ、言わんこつちやねえ。一度だけなら目つぶらねえでもねえ、だが、味しめた野郎は二度三度と入り込み

アブドーラ

間違いありません。このババアです。あの小僧のババアは。

カシム

損していない概ねフセインのお宝をせっせと埋め立て地へ運んでやがる。

老婆

あのね、おばアちゃんは忘れてたの、蚊取り線香買って帰らなきゃならないの。

生首フジタ　ケケケケーッ。もうカユくはならねえよ。たとえ蚊に食われても。忘れな、耳元でうるせえ眠れぬ夜のことなんか。

頭フセイ　ところが、忘れられねえんだよな、一度覚えちまうとなかなか。

老婆　ああ、忘れてた。あの子が言ってたよ。この街には四十人の盗賊がいるんだって。忘れようにも、忘れられぬと、

頭フセイ　忘れさせてやるよ、俺達が。断頭台を用意せい！

アブラとカシム　ヘイ！

頭フセイ　どうしても、この台が無きやならねえわけでもねえ、けれども、都合上便利だ。クビだ、ババアのクビもらえ！そうすりや思い出したくても思い出せねえ。忘れさせてやれ。

老婆　忘れるわけにはいかないんだよ。そりや困るよ。ただでさえ同じ様なのが100棟もあるんだよ、埋立地。

頭フセイ　お疲れ様でした。

また皆叫び出す。「稼ぐぞ、稼ぐぞ……」老婆は断頭台に押さえ付けられ、三日月刀のエジキに。「……お金が一番好き！」と皆が叫び断頭台から離れると、上に乗る首はフセインのものだ。

アブドローラ　　こうして組織の結束は守られ、システムは稼働し、丸くおさまった。

カシム　　これから、俺達二人、アブドローラとカシムの兄弟がお頭だ。

アブドローラ　　ここにあるのは、概ね、皆のお宝ってことにしよう。

カシム　　概ねってのは、ちよつとだけ、俺達兄弟の取り分が多いってことだ。

アブドローラ　　フセインのやり方には、元々ついて行けなかった。

カシム　　俺達は、穏健派なんだ。

盗賊7　　ババアだ、ババアがいねえ！

アブドローラ　　放つときな！

カシム　　どの道、長くはねえババアだ。

アブドローラ　　誰も覚えちやいねえよ、あんなババアのタワ言は、

カシム　　すぐに忘れちまうさ、あんなババアがいたことさえ。

生首フジタ　　しかし、いいのかい？・・・てめえの父親殺しちまってよう・・・。

アブドローラ　　もう梅雨も明ける。休んでるヒマはねえ、

カシム　　暑くなるだろうが、忙しいぞ、今年の夏は、

アブドーラ　とりあえず今夜は、皆、家へ帰れ、

カシム　仕事は家庭に持ち込むなよ、黙って寝てりゃいいんだ、お父さんなんて。

盗賊1　じゃ、ちよっと片付けして帰ろうか？ちらかってるし、

盗賊9　一杯やりますか、真っすぐ帰るのも何だし、

アブーラとカシム　開けゴマ！

皆、去りかけると、

頭カシムの生首　頼む、俺も連れてってくれ、都合上箱ごと頼む。

フセインの首を持つアブドーラとカシム。皆去る、フスマ閉まる。

く海の家く

盗賊達が片付けると、そこは海の家、誰もいないそこへ、少年戻り。

少年

おばアちゃん？・・・おばアちゃん・・・（と捜すが見つからず）何だよ、お父さんだけじゃなく、おばアちゃんまで捜すのかよ・・・（と下手のテーブルで頭かかえ）

すると、カウンターに、あの伯父さん現れ、ダンボールから、コップや食器出して準備を始める。

伯父さん

早朝だったなア、ちょうど先週の七月五日、また五だ。わかんなくなっちゃったんでよ、自分の部屋がどこなのか。同じ様なのが100棟もあるんだから、そりゃ、間違えることもあるだろうけど・

・、

少年、まだ、頭かかえたまま。

伯父さん

山ん中じゃあるまいし、住んでる人いるんだろ、他にも。何で埋立地のはずれの原っぱで力つきなきやいけねえんだ？・・・。皆、一人きりかよ・・・お隣も、ご近所も、家族も、親子も・・・。

少年 (ゆっくり顔上げて) 皆大騒ぎしたくせに、当たっても入居しないんだ、半分も。便利悪いし、吹きさ

らしだし、役所の人が、そんな空き部屋の扉にバットの印をつけて……。間違えて、うちにもつ
けたんだバット。それで見分けがつかなくなって……。

伯父 (コップを奥へたたきつけて)……。伯父さんと暮らすんだぞ。もう二人しかいないんだから。こ
の夏はここを手伝え。俺が教える、いろいろと。

少年 (立ち上がり、伯父の方へ向き) おじさんに引き取られるんだね、僕。

伯父 気にするな、親せきだろ、当たり前じゃないか。

少年 テレビで観たよ、何度か。同じ様な子のドラマ。

伯父 テレビはみな嘘で、本当は無いことばかりだと思ってたか？

少年 自分がそうなるとは思ってなかった。

伯父 誰だってそうさ。

少年 どうしよう、お父さんは、

伯父 まだ言ってるのか。

少年 一本も帰って来ないんだ傘、

伯父 忘れる、もう。

少年 留守がちだったから、普段からいなかったから、こうしていなくなっても、僕にはわかんないよ、どつちなのか。

伯父 忘れようとしても忘れられない人の顔、同時に浮かび上がるアザヤカな過去。そんなもん忘れられやしないのわかってる。でもな、いつもその辺にまとわりついて見え隠れされんのかなわんだろ。

少年 この夏、夏の間だけ、捜しちやいけない？手伝いもするから。

伯父 忘れる、

少年 九月になったら学校も始まる。そしたら忘れて行くよ、きつと、夏だけ、夏の間だけ、夏休みの間だけ。

伯父 忘れる、みんなだ、いろんなこと全部だ、忘れちまえ。

少年 ……無理です……。

伯父 もう梅雨も明ける、終わりにしろ。

少年 お父さんの上には降ってます。

伯父 夏になっても、夕立ちのたびに傘持って飛び出すのか？どこの軒下にいるかわかんないのに、どこの軒下にもいないんだぞ、迎えにいつでも。終わりじゃないか。

少年 行ってみなきやわかんないよ、

伯父 そういう人の記憶とは別の所で終わって行くもんなかたくさんあるだろ！……忘れろ、終わったんだから。

少年 ……よろしくお願いします。僕のこと……。

伯父 ……ああ、

少年 今年は暑い？夏。

伯父 暑いだろ、夏なんだから。

少年 来年は？

伯父 どうだかなア、

少年 その頃には忘れてる？

伯父 お前しだいだろ、

少年 暑い夏のたびに思い出さない？忘れるまでにいくつ眠ればいい？千と一夜？

伯父 ……諦めろよ、見つからなかったら。この夏でおしまいだぞ、捜すのは……。（と募金箱をカウソウの上へ置く）

少年 （浜の方へ目をやって）……浜には誰もいないね、まだ……。

この辺りで、おしまいにしなきゃいけない・・・。